
民國

久我[illegible]
水野忠敬
北郷久政
大口鯛二
大棚弘國
徳谷 行
南郷柳子
下田歌子
松平健子
中島歌子
河村重子
高橋御代子
玉 丸子

鍋島直大
宮地嚴夫
坂 正臣
千葉胤明
伊東祐賢
鍋島榮子
柳原愛子
小池道子
服部磯子
中澤延子
海上蒔子
蒔谷千登子
小西甚之助

十二冊半年分金

全國無遞送料

明治三十四年二月四日印刷
明治三十四年二月五日發行

編輯兼發行人 川崎直衛
印刷人 並木且雄
東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所 國光社
東京市京橋區南傳馬町二丁目十番地
發賣元 靜思館
(電話本局一千三百七番)

係る事務は國光社雜誌部に於て
東京市京橋區南傳馬町壹丁目七
取扱ひ候事に致候間自今國光及
會、御送金、御通知等は總て必靜
被成下度候也

從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候





ダイヤモンド入
甲價 二百五十圓
乙價 百八十圓
丙價 百三十圓
丁價 九十圓
戊價 六十五圓
巳價 五十圓
●廿金三匁付小判形角形無地印面指環 十五圓七十錢
◎廿二金四匁付小判形角形無地印面指環 廿二圓四十錢
●金五匁付小判形角形無地印

甲價 十九圓
乙價 十七圓
●十八金三匁付蝶番付三ツ折片切彫刻
甲價 廿圓
乙價 十七圓五十錢
●廿金三匁付蝶番付三ツ折平象嵌片彫刻付
甲價 廿三圓
乙價 廿圓

◎印材製作篆刻
應貴嘱

右の外金量の多少寶石の大小又は彫刻の繁簡精粗により代價に高低の品種々あり



凡賢

ざるべからず

ざるべからず

の膝下にありて、孝養をつとむる時に於いて、あつ
閨秀、其の數尠からずといへども、一度、他の家に
、嘗つて習得せる智識をば、實際に應用せらるべき
の當初の程こそあれ。漸次に意氣銷沈して、また、
といはるゝ分際に及びては、愚者をして、徒に、壽
恣にせしむるものゝみ多し。勿論、或者は、庖厨の

すたい少女としては人の妻たらむてとをのみ望
所謂安樂ばかりを希ひ、いまだ、國家の將來に對して
ことに注意せざるもの、比々皆然りとなす。
家庭に於ける敎育、また多くは、妻としての女子に
時に對ひては冷淡の感なき能はず。甚しき不注意なら



[illegible]

古今集に、
おもふどちまどゐせる夜はから錦
たゝまくをしきものにこそ有りける

眞佐子
ずやと。信
り。若し、
友といふを
信友は、樂
なり。

古今集に、

おもふどちまどゐせる夜はから錦
たゝまくもをしきものにぞ有りける

土佐日記に、紀貫之は、

さをさせどそこひもしらぬわだづみの
深きこゝろを君に見るかな

新後拾遺集に、西園寺の女は、

せめて今いひてなぐさむ友もがな
心にあまるむかしがたりを

と歌ひけり。そもく、和歌は人の志を述べ、亦、

は人生[illegible]

ずるため缺くべ

も、同胞とし聞

思はざるはなし

蓋し、細かく

な、同情を含む

人と人と相對し

[illegible]本來の愛情は、人の[illegible]

ども、禽獸草木、若しくば、玉石などに對しても、愛情起るといふも可なり。固より、嚴正にいふときは、我より彼を愛すれば、これに反應して、亦、我を愛するものにあらざれば、その愛や、久しかるべからず。深くなることなし。例之ば、良人より妻を愛する時は、妻より亦良人を愛する情、更に深きを加ふるがごとく、反應せざるべからず。

[illegible]

脈、好奇の情と

これらをも概括

心してよ。

曰く、我を忘

[illegible]

分にすることなく、滿足して厭くことなきは、是れ、理想の家庭に於て見る所なり。而して理想の家庭は、所謂理想の賢夫人是れが中堅となりて始めて形成し得る所のものたり。

をも概括
しよ。
、我を忘
るものと、
きにする
し。

三郎

れ、理想の家庭に於て見る所あり。而して理想の家庭は、所謂理想の賢夫人是れが中堅となりて始めて形成し得る所のものたり。

一家既に理想に達して後、一國平和の理想に達す。一國既に平和の理想に達して後、天下安きを得。狐の如く猜ひ、虎の如く睨み、狼の如く怨める所の國と國とは、此に至りて調和し、四海波靜かにありて、始めて泰平を謳歌することを得べし。而して其の家庭をして理想に達せしむる中堅たるべきものは、是れ其の夫人ありとせば、夫人の力偉

的に深く愛すの一事に胚胎なぞの愛と異は、良人を善民として、美んと欲するには、肉の愛な

安眠せしむる
る精神行爲の美
のつ少なかるべ

界にまじはり私慾に眩らめき、陥落僞計漸く奸に陥らんとす。是を救うて、善に歸へらしむるは夫人の任なり。良人善を爲さんとし、勇足らずして躊躇決せず、密かに内事を懐うて彷徨す。果然是を激揚して、勃々勇躍せしむるは夫人の任なり。良人善を爲せり。而して善の爲に苦しみ、迫害罵詈四方に起り、天下一人の是を助くるものなし。



神行爲の美は少かるべ鮮し。況ん美德の化身

政を理し、して、是を下德の夫人んては、彼



精華

勅語要説（承前）

東久世通禧謹述

夫、我が國の歷史を播くものは、國家の成立、皇祖天神の經營に係り、君臣の分は、皇祖の詔によりて、儼乎として確定し、皇室は、臣民の宗家とましく〳〵、臣民は、皇室の支流末葉たることを知らん。又、皇室よ　皇祖の

認めん。是、
稱するもの
句、悉、是、
總括して、
背馳せる所
るもの少し。
或は謂はん。

得ること能はずとすなは、大なる誤なり。今、試に、事實と敎訓との優劣を比較せんに、元來、敎訓は、世道人心の頽敗して、道義の事實存在せざるに因りて生じたるものにして、若、道義の事實にして存在せば、敎訓を設くる必要なかるべきなり。且、夫、之を設けたる者、必しも、心術行爲の正しきものにあらず。其の

欲はんとす。
りては、人の
化の力、至り

るべからざるなり。

孝女かね女

ては、人の
の力、至り
則、然らず。
其の理を解
ねんより
難を冒し、
事蹟を以て
入たらんと
要するに、
典たる質

孝女かね女

田山とり子

かね女は、伊豫國宇和郡高野子村の組頭を勤めし源七といふ者の子の新次郎が妻なり。新次郎が母は、わかきより、惡しき病にかゝりて、常に臥床にのみありけるが、かね女が嫁して二三年の後は、いよ〳〵、重りゆきて、眼さへつぶれ、手足さへなえて、食事をはじめ、彼是のことゝ、總て人

と戒めて、共
年六月、領主
なはりき、か
女が志にか

かこじり、かたや
は剛勇のみによ
機を知るは其
捕へがたき、機

て、目なれし四邊の物影淡く消え去り、聞きなれし友の己が名呼ぶ聲遙かに遠かる時迫りなば、さても、いかなる心地のせらるゝや。人らしきものにもありたらば……の追悔は實にも、血涙の湧くを禁じ得せしめざらむ。あはれ、あはれ。

大なる事、偉なる業とて人の世に聞ゆるは、悉

は、吾も人も、委しく知らざる處ありとはいへ、而し、彼は決して、平々凡々、裁縫料理のみの、女性にあらざりき、其は、實に、驊騮の譽、其の一擧を以てするも、斷ずるに憚らざるべくや。吾

頭のみによ
を知るは其
がたき、機
乘じ、こゝ
て、はじめ
縁ある業をも
常の、英物
り。
からぬ、斯
じて、遂に

而して彼は決して、平々凡々、裁縫料理のみの、女性にあらざりき、其は、實に、膊馬の擧、其の一擧を以てするも、斷ずるに憚らざるべくや。吾不文、彼によりて與へられたる、感想の悉くは、もとより、表彰する能はざれども、敢て斯く筆とるは、啻に彼の、英邁まれに見る賢女なりしを、稱道するに止らで、幾多婦女子の、知りて以て益する處あらむを期すればこそ。

舜何人ぞ、予れ何人ぞ、

* * * * *

に足らずして、
に似よれるもの
言ふところ、何
を以て、賢き女
朋友の如く、夫
らば、何處まで
なゆめあらずな

[illegible]れば、一言[illegible]て
すとされば、これ
も思ひなし、こ
男も男、女も
世にもあるかな

るが、無上の務にて、美味香食を得るが、最大な
る幸福よと思ひ、其の理想ともいふべきは、……
……花見、芝居見物、さなくば縁日の散歩に、夫
と手をつらね、新調の晴衣と過分の小使とに、得
得たらむ位にて、して其の夫とても、己が妻は、
將して母たるべきの、資格を備へたるか、まし
く、一家の内政に、盡力しつゝありやなどは、夢

[illegible]
吾れ此の名將に驕り、以て、主公に見ゆるもの
あらば……
の、大なる慾望は、最も強く最も烈しく彼の、
胸壁を刺激したりき。嗚呼貧乏の悲しさよ。如何

も男、女も
もあるかな
想の女子に
志を有し、
は、富貴貧
。まして、
が所謂、女
なり、夫の
稱して餘り

の、大なる慾望は、最も強く最も烈しく彼の、胸壁を刺激したりき。嗚呼貧乏の悲しさよ。如何とも爲がたきに、彼は天を仰ぎ、

痛しき哉貧や、

の、長嘆息を洩すに至りぬ。

筮仕の始め、斯の名馬にまたがり、京に入りて、主公の榮を成す。あはれ、士たるものゝ、大事にわずらして何ぞ。英邁果斷なる賢女は、能く思を此に起し、斯く決定を下して、己が、貧士一豊に

人事を識別し
以て、極大な
機を知れるもの
り、夫の品位を
事を完成したる

有作言三

雑煮三献出したりしやう
土産目録披露終りし時、運二人膳部を持出たりき。男女の眞中、神床の方によせておき、。初献に熨斗、昆布、勝栗、二献に雑煮、五種盛、田作盛、三献吸物、船盛、羽盛と、献毎に左右に出すべく調したりけるを、時間の都合とて、一度に据ゑられたりき。されば、こは時に随ひたる通ひの様と見て後

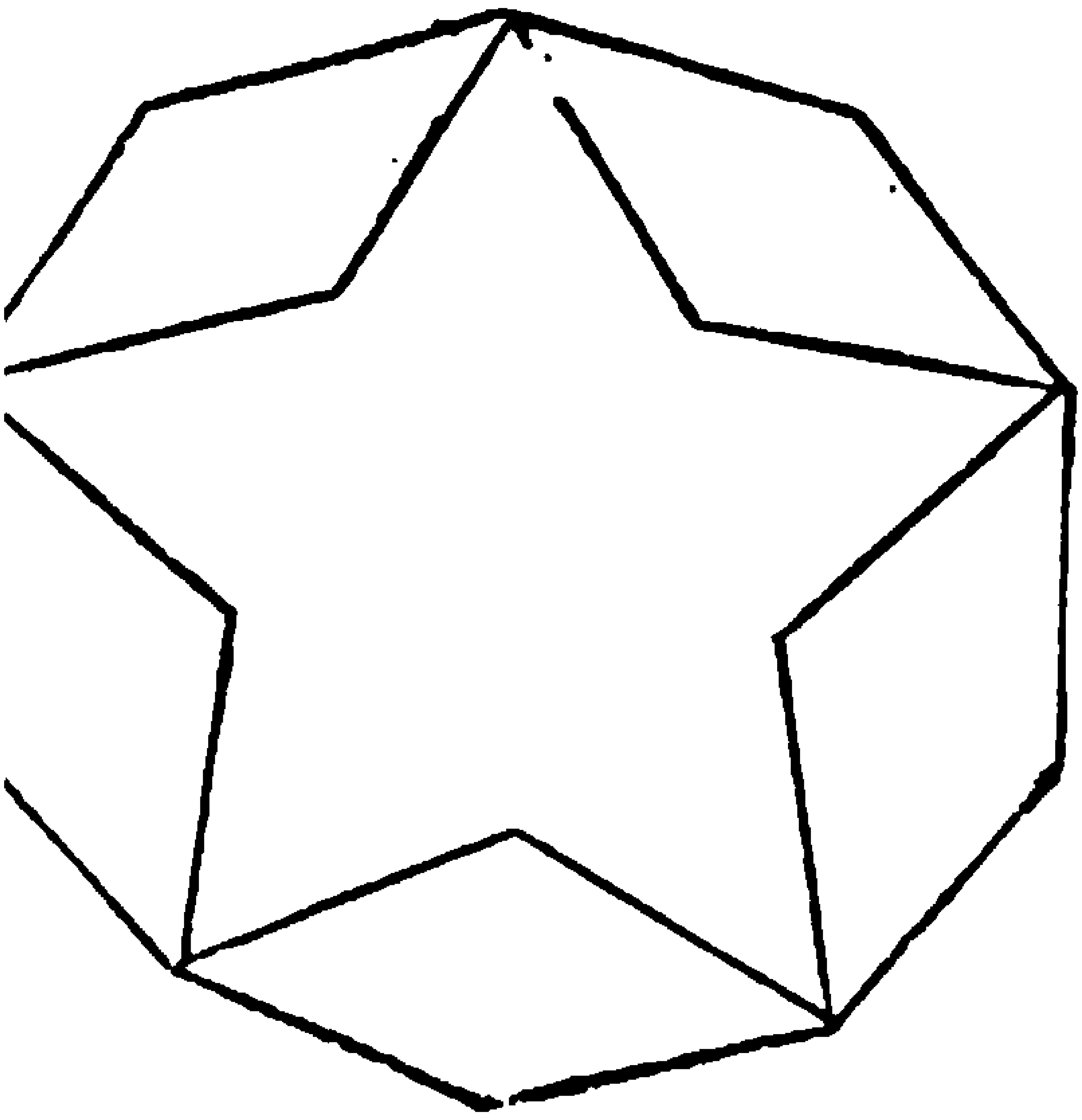
れらし者のいひ
膳にものしたる
めて(下輪とは碗
ざらん爲めの器

折方

有生くわう子

輪とは碗
ん為めの器
りて廻らし
を菊の花瓣
おき、其の
にきりて、
の鯛、鰭付
掻たる、の
龜甲膳に
の右に船

ききやう高立

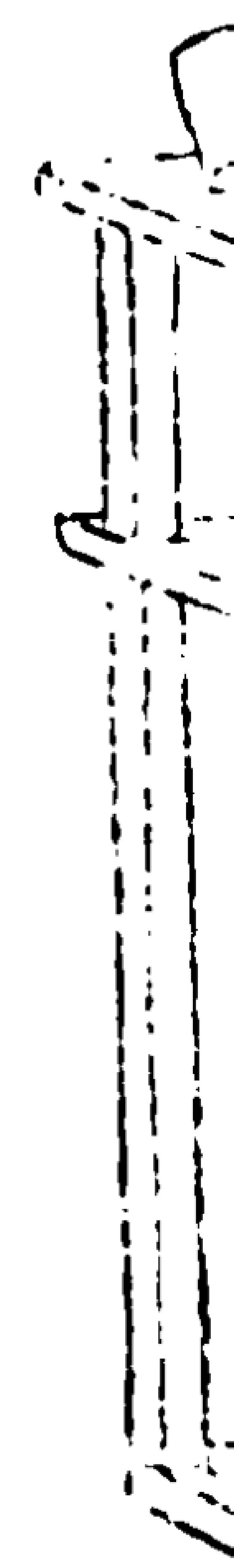


有住くわう子



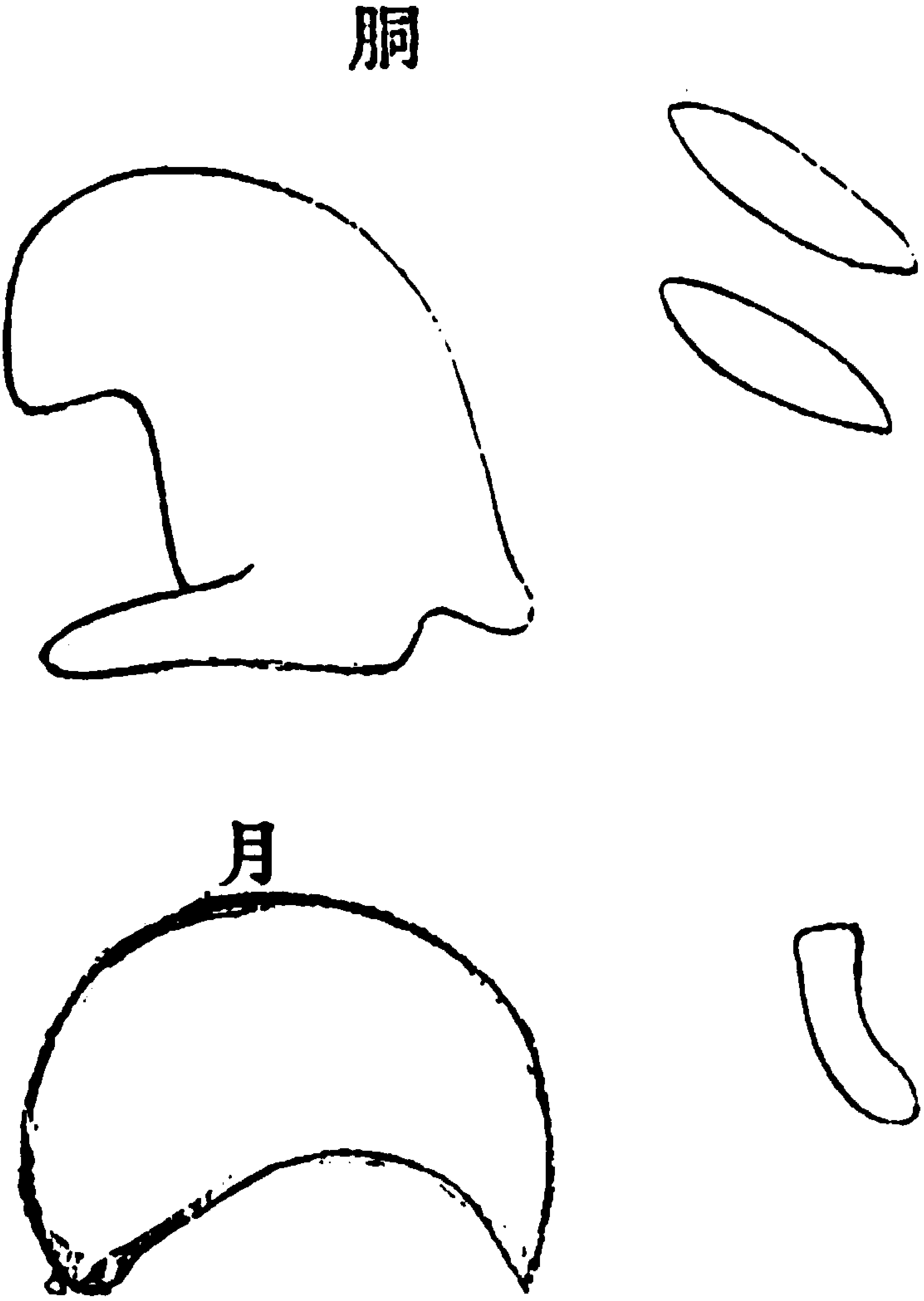
茶入、下に蓋置、

を置合す。子棚の部にて、四疊半點あり。又風炉の時も用ゐる。上の天井には、點前の具は飾る事なし。花入、香爐羽箒、香合塲合に寄、可レ飾、氷指は、二重棚同様運び、或は、置付時に可レ寄、濃茶の時、袋を釘にかくること可レ有、亦、旅簞笥の如く、中棚の板を引出し、





入、
下に蓋置、
に可寄、尚、



右の圖の如く厚紙に形どり、月には緋縮緬を、綿を入れずにベッタリはりつけ、耳と手にもまた、

やはらかにありたるを見計ひ、小口切にして、皿
に盛り出すべし。

蛸のたゝき

蛸の頭を細かにきり、庖丁にてよくたゝき、是にさ
つまいもの皮をむき、摺がねにておろしたるもの
を交ぜ、麥粉少量を加へ、よくこね交ぜ、甘煮に
用ゆるもよし。また、胡麻油にて揚げたるもよろ
し。

冊形にきり、
醤油にて鹽
みて、味よし。



醤油にて鹽
みて、味よし。
をつけ、燒鍋
うにを酒に
燒くべし。
清汁の中へ
……る。



國文學講義

田島利三郎

春夏秋冬

春は、あけぼの。やう／＼白くなりゆく山際、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきた

ありけむ。
て物しつる
媛も知しめ
草紙の發端
ゞ二人して
ことは、今

へるのは、身
はれる。日が
の(そよぐ)

(おもしろく)螢(のおちるとき)…山)飛び交ふありさま、雨などの降るのまで身にしみておもしろう思はれる。

秋は夕暮(ギヤ。)夕日きら〳〵しく輝りかゞやきて、極、山の端ちかう(今や沒せんとするぐらゐ)になりたるに、烏が、ねぐらの方へ行かうといふので、或は三羽、或は二羽、或は四羽、(おもひ〳〵に群をなして)飛び行くのまでも、實

かり多いやうになつたのは、わるい。(これはかりはおもしろくない。)

はれる。日が
風の（そよぐ）
きはめておも
うた夙朝は、
いことヂヤ。
る景色、實に
おど降らずと
とくおもしろ

りはおもしろくない。）

冬は、の下、春曙抄には、つとめて四文字なし。今、一本によりて加へたるなり。春はあけぼの夏はよる、秋はゆふぐれとかき來れるもの、冬のみ何ともなくてやは。

○はなやか、はてやか、はなばなしくなど同じ詞にて、さかんにうるはしく、きらびやかなるありさまをいふ。○おかし、あはれ、共に、身

木天游

藤拙堂

院。故有二此名一。下二前崖一。行。至二大谷一。

樹依約。不レ見二其所一レ極。暗香蓊勃襲レ人。問二溪壁益近且大一。至二咫尺不一レ辨レ色而後去。

一目千本は、尾山八谷の一なり。花最も饒し。故に此の名あり。蓋し、芳野の櫻谷に比すと云ふ。余同人と院を出で、前崖を下る。山水と梅花と、皆已に佳絶なるを覺ふ。意に任せて行く一大谷に至る。文稼識りて之を言ふ。徑詰曲して上る。花之を夾む。歩して其の間に出づ。白

輝映す。余嘗此の解ありて花をみる。此の

の名を附たものでありなます。」と申しなます所は、尾山村に、八つの谷がありますが、其の八つの谷の中の一つでありますのぢやが、梅の花が梅溪の中

此の勝ありて
をみる。此の
に之を西土に
杭の孤山境は
の鄧尉、花は
羅浮の梅花村
も饒し。我梅
黄昏、花淡烟

名を附たものであります。）と申します所は、尾山村に、八つの谷がありますが、其の八つの谷の中の一つでありますのヂャが、梅の花が梅溪の中で、最第一番に多い。（饒とは、衆多と申すことであります。）其のワケヤイを以て、此の一目千本と云ふ名があるのであります。蓋（蓋は推原の辭なり。）蓋しナンデモと云ふ意なり。）一目千本と云ふ名は、ナンデモ、芳野山の櫻の谷で、一番に櫻が澤山ある所を、一目千本と申しますから、ソレに

して、　茲所か、
所ギヤと云ふ
は山路なり。
上の方に昇り
し。)サウシテ、
ます。ソコデ、
山の上の方に昇
白雲を躡みて、

の花が咲滿て、續き渡りてをりまして、眞白くし
て、(彌望皜然とは、見渡す限り、梅の花が咲きつ
づきて、白き景色を形容したる文字なり。)谿や山
やと、梅の花とが、相互に輝き映り合うて、あか
あかの勝景でありますo(茲所迄は、一目千本の勝
景を、述べましたもので、是より以下は、其の勝
景を、他所の勝地に比較して、優劣を論じました
でありますo)

野山ハ遊ビカ、
景色をみまし
して、チヨウド、
し、見渡す限り

花の多く咲てをるが、此所にハ及ばぬのく、
嵐山の櫻花も、芳野の一目千本も、此所の盛と勝
との二を兼幷せてをります景色には、及ばぬのヂ
ヤ。ソコデ、更にあらためて、之を西土の漢土の

、チョウド、見渡す限り一の盛なことと目千本の方、此所の様な、花の多いて所には及ば

嵐山の櫻花も、芳野の一目千本も、此所の盛と勝との二を兼并せてをります景色には、及ばぬのヂヤ。ソコデ、更にあらためて、之を西土の漢土の方に、此所に比較すべき勝景の地があるかと、求めたづねてみまするに、漢土の内で、梅の花が澤ると云ふを以て、世間に名高き所の地で、杭州に孤山と申します所が御坐ります。(古より有名な、林和靖が古跡であります。)が、孤山の境界は、蓋しナンデモ(此所の蓋は、ナンデモと云ふ心持と

て寒溪の、さ
かく〳〵幽邃の
花が、尤も饒
とが、共に備
に比くらべて
でアラウカ。
らぶべきの勝
語辭なり。さ

云々と、端を改めまして、復眼前の景を、述たも
のであります。)
日已斂昏で、日がもはや西山に斂まりて、薄昏く
ありしまて、(斂昏は、入日にありて、薄昏くなる
ことるなり。斂は收なり。ヲサマルことなり。)梅
の花が、夕方の淡き煙靄の中に隠れ、糢糊として
サウシテ、千樹で、澤山の梅の木が、依約彷彿と
して(依約は、彷彿として、連りて居る貌。)其の

んに人に薫り
にあり。蓊勃は、
口が、段々と下

が、誠に情致あるの筆であります。

…に人に薫り
…り。蓊勃は、
…に、段々と下
…にあるもの
…し、愈々益々
連れて、其の
…と、サウシ
纔かの距離の
ことの出來…

カ…

誠に情致あるの筆であります。

梅

式子内親王

なかむれば

しつゝこしへの



二ひざ程進み
用意あらば、
を進み、机上に
示すべし。玉串
末にそへ、目の
前に向け、末を
拍手をせぬかた
はる事あらば、

御前を過る事は

一貴人の御入候坐敷へ参るに、敷居際にて、そと下に居り手をつきて敷居を越ゆべし。間近く御入あらば、膝行して参るべし。仰事あらば、手をつきて承はるべし。箇様の時、また、むかひにうかゞふはわろし。少し、右か左へよりて伺ふべしまづは、御左へ参るがよし。御ひざのあたりへ、目をつけて、うかゞふがよろしきなり。

一貴人の御前を渡ることあらば、そと下に居り、

かゝる恥尤も妙なり。人豈に欠乏の時を忘れすは
いかで、贅澤を云はんや。然るに、人情の弱點
は、兎角安樂に慣れ易く、又、耽り易く、惰を

…・…は

――

―主人

にゝおよぶ時は

…みを生じ、

…り。

くる眠たも妙なり。人豈に欠乏の時を忘れずばいかで、贅澤を云はんや。然るに、人情の弱點は、兎角安樂に慣れ易く、又、耽り易く、隴を得ては必ず蜀を望み、岐路はまた岐路に迷ひて、結局は倦怠に終るもの、比々皆然らざるなし。此の歌「好みの多きといひて」、さる人は早く倦むといふ意を寓したる、句簡にして旨廣く味深く、まことに、得難き警醒の語といふべし。終りに、秋の山猿といひて、猿の食慾を開かせたる

して狆のか、子なければ、うひよろしからしとぞ。此の甥、詫もせで、きて、さらに子家つひに絶えに。。。。。如くせば、そ

不在を問はず、うに、夫に示すかりなし。さる

ば、家人のかりそめにも之れを過することのなしき時は、之れを責むることよの常ならず。その夫もまた愚にして、之れを戒めもえせず、わが子とてなければ、いよゝ猫をかなしうせり。之れに反して、婢僕をいらゝげ使ふこと、いみじく酷にして、寸毫の用捨なさけもなく、おひまはし少しの氣に入らぬ事あれば、聲あらゝげて叱り飛すこと、女どもおぼえぬばかりなり。

人の笑を招かぬやうの注意こそあらまほしけれ。

に
、夫に示す
あし。さる
。手負ひて
るを見て、
いふ如く、
から看護す
はすぎじと
、或は人の
あらむか、

人の笑を招かぬやうの注意こそあらまほしけれ。

各國婦人の特色

三石直方

▲他の長は、資つて我が短を補ふべし。他の短は、以つて反省の料となすべし。

▲たゞ我が長をすてゝ、他の長短をあはせろさの愚をなすべからず。

第一章　英吉利婦人（承前）

には、更に、
、赤十字は、
に由つて唱へ
なり、洽く赤
レンス、ナイ
然らば、此に
爲を傳ふるこ
の精神を發揚

り、物品を與へなどし、あらん限りの温情を以て之に接せり。

既に長じて、慈心益々長じ、慈善家として孃の名は早く數十里の外に聞えぬ。蓋し孃の渾身は、博愛慈仁の巨塊とや云はむ。終始一の如く、老に從つて、益々盛に益々美なり。而も、孃が慈心を斯く迄に發揮し得しは、身に内顧の係累なく、家に巨萬の資財ありしに因らずんばあらず。次に、孃

の中に藍せし

嘗ては、陣頭に臨んで劍戟を趣ゆる堀溝の如くありし荒猛者も、疫癘に向つては一矢だも試むる能はず、脆くも鬼籍に上せられぬ。左れど、此の

之を蹂躙し、國の南門、誕幾十年、而も、英佛、士を撥け、戰數度、大に

りし荒猛者も、疫癘に向つては一矢だも試むる能はず、脆くも鬼籍に上せられぬ。左れど、此の戰爭に於ける死亡者の總數、二萬〇六百五十六人。中に戰死者は僅に二千五百九十八人にして、其の他は、悉く病死者のみなりき。就中、不幸の大隊は、一隊を擧げて病死せしものあり。故に、如何に健全の隊も、罹疫者の苦悶を聞かざるはなかりき。

クリミヤ戰爭をして、若し、當初七ケ月の如き病

にして、患者
孃の着後直に
は麻の如くに
は、犇々と院
は寒く地は凍
共に堅ちんと
患者の殖ゆる

ぬ。孃が戰地
酸を嘗めて、
ぞ。

由來纖弱の資あるにも拘はらず、全一ヶ年計の非常なる勞苦の結果は、心身共に疲れ、加之、瘧癘に犯されしため、忽ち病床に就きしかば、人みな其の歸國を勸む。然れ共、孃は悉く之を斥け、平癒後、復直にスクタリー病院に於て、其の責を盡くすに餘念なかりき。

既にして戰は、局を結び、全軍其の本國に歸る。

是等自家の榮譽を意に介せず。獨り、靜に田舍に退きて、其の身を養ふ。而も、病床看護より、病院組織等の事に至っては、須臾も其の研究を怠ら

を嘗めて、
。
軍を覆滅せ
榮譽ある歸
前數者は、
身を以て、
は、慥に、
を得しに勝

退きて、其の身を養ふ。而も、病床看護より、病院組織等の事に至つては、須臾も其の研究を懈らず。後、遂に、宏大なる救護病院を創立す。而して、孃がクリミヤ戰爭に光榮を荷ひ、病院を組織するに至りし、然る所以の理由あつて存す。請ふ少しく之を說かしめよ。

○ナイチンゲール孃の素養

孃は、如何に博愛慈仁の巨塊と云ふも、抑、之を施し、之を運用の道と術と知らずして、何ぞ、其

多年の宿望を一
の巨塊たるを知
身を、此に煥發
力の仰視する所

戀わびてわがみるものとしるくもかふてふ夢は
うれしかりけり」いとゞむすぼこれたまふ。まぎ
らはしに、御前なる籬のしもつけを折りて
咲花もおもひのいろにこがるゝやむろの八しま
の物としらなん」かくれば袖にとて、女君のもと
につかはす。御かへりも、すなはち、
深からぬむろの八島のけふりとてあだなる花の
いろにまがへる」うつろふものはと、うつくしげ

るかたなきまゝ

すぎんとし給ふるに、わらはの聲にて、今日は、
まらうどの、とくもおはしけりな。辨の君にきこえ

ふ。おほは
たなきまゝ
してへおは
かに見めく
ほきは、都
やと思す。
北おもてな
にしなし、
ざまも、な

すぎんとし給ふるに、わらはの聲にて、今日は、まらうとの、とくもおはしけりな。辨の君にきこえてんとているめり。又、ひとり、誰もいそぎ來てのぞきて見給へ。いといときよらに、繪にゐるをとこのすがたこそし給ふれ。かゝる山中にはかたじけなきぞかし。京の殿にてみしより、こよなうも、にほひまさり給へるかなど、さかしげにきこゆ。おくなる人々いでけるにや。簾より、いろいろのきぬども、つま〳〵こぼれいでたり。過ぎ

は、
間(ま)ちかき道(みち)も
わらはめしよ
るせよとてつか
までに、さりけ
など問(と)ひたま
、わらはにも聞(きこ)
と見(み)なし給(たま)ふな

かでぬ。御前人(おまへびと)すくなゝるほど、君のつかひ給ふ
わらはまゐりて、あなたより、辨(べん)のおもとの文(ふみ)さ
ふらふとて奉(たてまつ)る。
よそにのみなびきはてつる夕烟(ゆふけぶり)名さへかひなき
千賀(ちが)のしほ竈(がま)」己(おの)がさま〳〵とか御前(おんまへ)にも思(おぼ)しみ
たれてなんとて、
うつりゆく露(つゆ)の月草(つきぐさ)あだなりし心(こゝろ)のいろによそ
へてぞ見(み)る」ありしよりげにと、いとめでたき手(て)

わたりの。めづら
ある涙(なみだ)ぞはれ
たなき。いかで、

たどりかはしゝわらはの、けはひして、こまやかに
れば、やがて、そなたにおはしたるに、文(ふみ)さしい
う。人見(ひとみ)ぬかたにてあけたまへるに、辨(べん)がふみは

る涙こぼれ
なき。いかで、
さらめまほし
かねわたりに
ねんずるもく
にけりと、あ
かく〳〵にみだ
わらはにた

れば、やがて、そなたにおはしたるに、文さしい
づ。人見ぬかたにてわけたまへるに、辨がふみは
なくて、ほかにかよへるとか。きのふひるねの夢
のうちに、あの女君の聞え給ふとおぼえし、おな
じことの葉、一文字もたがはでか丶れたる、手
はさきに見しま丶なり。いとあやしき事のうれし
くて、さは、まさしき夢にやとたのもしう、なほ、
こ丶ろみまほしければ、返りごともきのふのま丶

人類巣

孤峰菴不美

の入りに亭主を引上ゲ、かあるふくべを亭主、ぬれ釜をかける。予におもしろか

石を領す。宗易宗久宗及と英名天下に聞ゆ。大德寺第一世春屋國師は、同氏の子ありと云ふ。始の入は勿論、茶の湯の時の事あり。銘水は、附言の如く、大阪天下茶屋の水あり。何方の誰よりと云ふ事は不詳。され共、想像には、知己信友の茶人あるべし。銘水の到來を、最も賞翫して、掛置きたる釜を引上げ、勝手は、則、水屋樣の所あるべし。則、

此士客方より出
なり。是をれろ
れは上手同志の

得ることがたきことあらん。諸媛御婦人方此の點に御注目を願上升。

ン。是をれろ
は上手同志の
氣轉、一言も
出して、炭手
丑、又其の炭
あらざらん。
思ふ人もわる
し及ふべから
け忠興公も、

得ることがたきことあらん。諸媛御婦人方此の點に御註目を願上升。

附言の段は、天下の銘水を並へ揚たるものあり豐太閤も、此の水を御賞翫にて、常々御用水に相成りたるものあらん。

曲亭馬琴が眼中に映ずる女性を論ず（其の二十）

必然の事あり。者あり。心狭きみふかきさがの地にも角にも、はあらず。時に半七等の近、名所古蹟を遊

施の兩人は、元來心よからぬ奸佞の輩なれば、半七の病ひに伏しゝを、無上の幸機となし、奈良の方へは、半七の樣子を少しも知らせず、主君吉稚丸には、頻りに淫酒を勸め、笠屋夏が女兒の小夏、弟子の三勝などを呼びて、酒宴に侍せしめ、晝夜淫樂に耽りしを、半七は更に知らざりき。之により費用も嵩みて莫大なれば、屢々大和へ云ひやりては、その遊蕩の資を辨ぜしが、吉稚は三勝

を買はんと
勝は元より
なれば、た
金鐵の如く
其の養父平
ぐれし男の
なる御方な
絶して、こ
らずなりぬ

を鳩めて、密に平三をうち殺して、三勝を奪はばやと、議する折しも、走卒めきたる者、急はしく走り來て、おのれは管領晴元朝臣のおん使なり。今夜俄に來賓あり。よりて三勝を召さるゝなり。黄昏の頃迎ひ轎を來すべければ、その準備して待ちねと、云ひ果てゝ、又忙しく走り去るを、全八は蝶九郎に密語きて、物蔭より飛んで出で、彼男を縊殺し、その衣服袴を剝ぎとり、屍を叢の中に投げ入れてふかく躱し、後をも見ずて

…の來りし所用
…を徴する事度
…、行いてその
…れる事一月以
吉稚丸の淫樂
知れり。され
しに、人の告
放蕩を聞き、

煩ふけしきを見て、厚倉は膝を進め、幼君の命を極はんこと余の方寸にわれども、惜しいかな、之行ふ人なしと、いうて半七の自ら當らんといふ言をまちしに、義に勇む半七は、某身を殺して代り奉るべしといふ。

厚倉莞爾とうち笑みて、御邊は志父に勝りて、忠臣無二なることは、われよく知ろが前に、實はわが胸中の苦計を告げてその事を行はせんために來れり。さはいへ、その身不忠不義

…しも、君のため
…合へ、厚倉は…

じんに殺すべき、不便を加へて、貧しくとも、諸共に世を送りたまへ。われ亦平三とやらん彼が父

ひ、君のため
こ、厚倉は悦
の任に當るべ
放蕩といふは
ひ、主の名を
し逃亡せりと
拂ひて、いづ

じんに殺すべき、不便を加へて、貧しくとも、諸共に世を送りたまへ。われ亦平三とやらん彼が父に、身の價をとらせん。血氣に任せて、人を殺し身を失ひたまふな、と留めしかど、半七の決心堅固にて、人には曾て漏らしゝことなき、おさんといひなづけの事をも、はじめて語り出で、園花とだに、ふしどを共にせざる者を、舞々三勝を伴はば、之れ五十歩百歩なり、此の條の事によりて、多年の志をひるがへすべきにあらずと云ひて、

び給ひ よびよい
ご家にあらずさ聞か
たづらに、あがし
、しばしばくもろ
主が影二ツ、聲き
て死ぬるか、
るか。大厄難は
危急存亡の際、
見庭の端書に、
に、堀川百首の

得ん。

（以下次號）

柿屋餘談

赤松景福

○シャクリ　人の啼く時、一種の聲を出すを、俗にナキジャクリすると云ふ。字鏡に、歔欷、涕泣貌、泣餘聲也。左久利とあるは是也。シャクリを

のか。
衛と俗にいへるものあり。所謂肩衣より轉りしな

陛の端書に、堀川百首の
し見けむたか
昭も、竹取は、
しるべき由。
竹葉瀬なと
を引けり。さ
知く、タカト
し、此はタケ

衛と俗にいへるものなり。所謂肩衣より轉りしものか。

○竿の上の袖無　昔、秀吉公舟に乗りて、大坂より伏見に著れしが、岸に高き竿立て、その頭に袖無一つ掛けたり。見るもの、いかなる由とも知らざりけり。秀吉公、こを見ていはるゝやう、是は我が高貴の位にあるは、身に不相應なりとの喩なり。其の意は、ソデナイモノが、高い所に居りといふなりといはれたりとぞ。ソデナイ(袖無)とサ

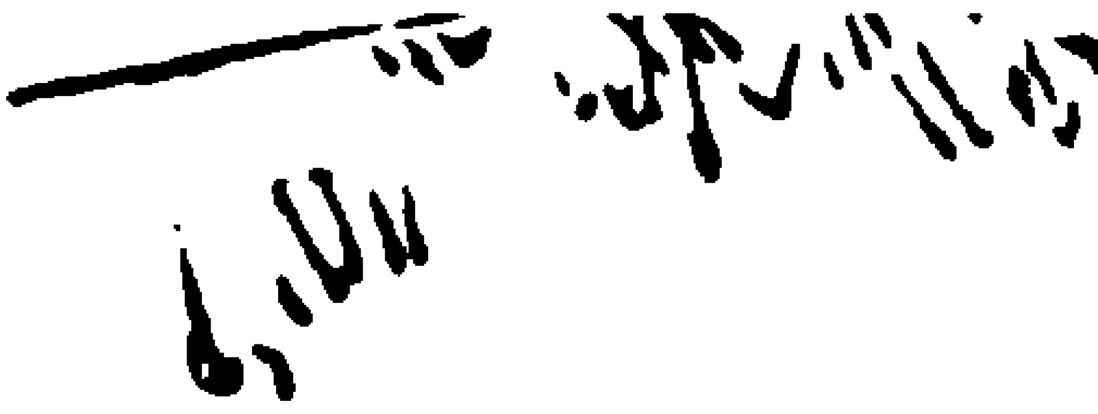
辭はイナム事
ヲ、と云ふに
似たれど然ら
國語あり。祝
て、答ふる辭
將物語に人の
し、女はをと申

しろき肌は月にてり
清きかたりは風たまつ
なれがやさしき此の様た
つげばや母に枝そへて



爾雅に、二月を如と爲すとあり。如月の稱、蓋し此等より起りたらんか。

世俗、如月をきさらぎと訓めど、正しくは衣更着



螢雪

要には、二

等より起りたらんか。

世俗、如月をきさらぎと訓めど、正しくは衣更着と書くべきにて、奥儀抄に云へるやう、

正月はのどかなりしを、此月さえかへりて、衣を更に着る心にて、きさらぎと云ひ習しけり。

とされば、之れも、きぬさらぎと云ふや正しからむ。藏王に、

佐保姫の空に霞のきぬさらぎ
ながき日かげも此の月ぞしる

節となし來りた
日の如くにぞ改
、日と稱へらる
五月斗指レ卯ニ爲ス
之牟ニ也故爲ニ之チ
而已矣。陽生ニ

亦、古歌には、雪消月ともあり。

年を經て春とも見えず富士の根の
ゆきゝえ月の頃もふれゝば

友則は、嘗て、梅津佐月といひて、

うぐひすのかよはぬ里の宿はわらじ
花さかりあるうめつさつきに

其の他、雁がねの睦しく、數多の友だちと、只一連に古里へ歸る月なれば、とて、雁歸月とはいひ、

な

として輸入し來り、人心漸く物質的文明に走り、恬として、我が國體の尊嚴なるを顧みず、甚しき

かに、陽氣の
め、地には、
とばかり眞白
戸出づる鶯が
や、桃の花の
味の愛らしさ。
さかんなるに

として輸入し來り、人心漸く物質的文明に走り、恬として、我が國體の尊嚴なるを顧みず、甚しきは、心醉の極、いまはしき、耶蘇紀元の曆日迄移して、高潔純美なる、四千餘萬の大和民族をして、日毎に仰がしめんとは、今にして救はずんば、由由しき大事とも成なんかと、日夜苦慮して、遂に、神武天皇の即位まし〳〵たる、辛酉の年を以て、我が國紀元の始めとなすの至當なるべきを、建議するや、かしこくも、今上陛下大に嘉し給ひ、

のはぬ者ども、
に位かせ給ひし
それより前、神
ず、さらば、

しを、時の、太
可は誠に可な
●與の二字を削ら

の有名なる、唐
にぞありける。

長閑にも風になびける青柳に
しらべやすらむ鶯の聲

など、賞めたゝふる黄色の羽毛麗しく、形小さけれども、聲いと朗かにうつくしき、我が國の鶯にはあらで、朝鮮ウクヒス、又は、カラウゲヒスと云ひて、聲も、色も我が鶯に似、尾と、羽とに黒毛ありて、大いさ百舌の如くなれど、二月より鳴き初むれば、世人の誤りたるならんか。

[illegible]
とす。然るに、汝の無駄なる此の如し、古語にいはずや、言ふ事はやすく、行ふ事はかたしと、言

名ある、唐
てありける。
來りけれ
兩人、沈思默
づ唱へらく、
ころが如し。

妹を諫めて曰く、女は禮を質ふをよし
とす。然るに、汝の無禮ある此の如し、古語にい
はずや、言ふ事はやすく、行ふ事はかたしと、信
ある哉、世の中の事、總て口にて言ふ如き、たや
すき者には非ず、愼でやはと、山谷次で其の作を
求む小妹依つておもむろに、

和風扶二細柳一。　澹月失二梅花一。

と答て、先きの無禮を謝したれば、「兩人大に驚き、
且、歎じて曰く、汝が詩意に通ずる、誠に鬼神の
如しと、擊節歎賞すること、極りなかりきとか。

又、年々吾人
或は、病の爲
勝ること、五
の云ふ所ろなれ
きものとすれ
治五十四年の今
に乳を與へて、
滋養のために肉

侯爾たる黄昏、

あたを指して聞ゆるは、草刈る者の迷ひ入りしか。……笛はます／＼吹き澄まして、あはひ近くあるまゝに、と見れば獨りの草刈り童、其の年は十二三あるべし、腰には鎌とふぐせを插し、鞍には兩つの籠を掛け、手に一管の笛をとり、黒き犢に尻をかけて、木の間を出でゝあゆませ來つ、伏姫を尻目にかけて、あは草笛の音をとゞめず、牛を流れに逐ひ入れて、渉さんと

旅のらくがき

明治三十三年熊本の旅舍に於て　深山庵主人

倒たる黄昏、
嚠喨たる頃、
との牧牛。
らむ
ひ、歎賞せし
與ふることの
るに至るべし
全、本田尊

旅のらくがき

明治三十三年熊本の旅舍に於て 深山庵主人

(八)熊本と長崎 其二

けれどもを『バッテン』、たまらぬを『ノサン』、多き少きを『多カ少ナカ』など云ふは、西部九州皆な一般にして、熊本と長崎も、其の語脈に於いては大差なきに似たり。只だ其の風俗の異なれるが如く、熊本は、其の言葉づかひ野卑にして、調強く急に、長崎は、おのづから優長にして、耳なれぬ鄙びたる土音さへ、柔になつかしげに聞ゆなり。

と云ひ、長崎
ッなから、日
十年も後に至
を呼ぶに『お
れど、單に、
ア』と云ふ。
』はヨカバッテ
イ』の如し。
り。人に呼ば

『腹カク』、急ぐを『アセガヲ』、五月蠅きことを『セカラシ』など、耳馴れぬ言葉多けれども、熊本にては、左のみ甚しからず。長崎人と對話して、最も、いちゞるく耳に響くは、『大きにおなた』と云ふ言葉にて、熊本人との對話には、『イサギヨイ』と云ふ言葉、最も、屢々繰り返へさるゝなり。倘は、他に異れるふし多けれども、音調に屬するもの少なからざれば、一々筆には悉し難し。

子
夢よりも淡
われ月」を讀
にして、或親
したるもの。
與謝野三氏の
たり。近來、
道の論議、こ

敢て評せりとにはあらず。

抑三十一文字の詩形は、將來に於て、何發達すべき餘地を有せりや否や。此の小詩形は、如何なる程度までの詩想をあらはしうるか等の問題を、茲に詳論せむは、あまりにこちたかるべし。されど余は、こゝに簡單に、余が短歌に對して、有せる意見を陳べむとす。是、蓋余が此の集に對して、記さむとする意見の因りて基く所あればなり。

余の見る所に因れば、短歌は、將來に於ても、短

るべけれど、舊に、區別せらるもとて、之を小の門下もあり。もあり、之に加るあり、いづれ和歌の革新をぶふへし。而し

今此の著を讀みて、如上の言を吐かざるを得ず蓋氏の風調は、やがてこの著者のそれなればなり。

この集中にありて、面白しとおもはるゝは、多く敍景の歌あり。一つ二つをあぐれば、

鳳仙花照す夕日におのつからその實のわれて秋暮むさす

あけがたのそゞろありきに鶯の初音きゝたり畝陵の道

色つきしオレンヂの上に霜みゐてあささて寒し雞の聲

畝がけによろぼふ鳥居斗みゐて赤き櫨に椿ちりがゝる

あり明の月影あはき園慈に桐の葉さそふ風なみるかな

かり。この集よ
くなからず、さ
く贈答の歌
んに陥りやす
それもその
こそは、お
その興味を
一十一文字に
これらの歌

叙情の歌とをいひなへるものゝ中にては、

五年のむかしに似たるこの夕芭蕉の雨をわれひとりきく、
祖父君と呼ばせ侍らぬ恨かなう孫の君のらうたげにして
ほそりゆく火かげながめて長き夜を思出多き梧の葉の雨

これらか先、とりいづべき方なるべし。されど、あまりにてだいめきたりとの後言はまぬがれ難かるべきか。

さてかくは記したるものゝ、とりすべていはゞ、中中に、めでたきふし多かり、殊にわづか一年などの間に、かばかりの佳什を詠みいだされたりし、著者の熱心はげに、吾人、疎慵のものゝかけて

崎正風

くるらん

我建通

なからん

島直大

谷ふかくなくうくひすにこの岡の
梅のはやしをしらせてしかな

野外梅　坂正臣

梅うゑてひとまつ家もみゆるかな
なかばはゝたとなれる野中に

池邊梅　大口鯛二

池とのゝおはしまわたる春かせに
うめか香さむき夕まくれかな

り

葉胤明

しほなかりおり並磯きことはからし
磯のわか菜はおひそめにけり

薬　胤　明
あひら
畑　弘　國
ぬらむ
東　祐　賢
む
谷　行

しほひかりおり立頃もとほからし
磯のわか菜はおひそめにけり

霞添山色　　柳原愛子

うら〳〵と昇る日影もかすみつゝ
長閑にみゆるとはのやまのは

雪中鶯聲　　下田歌子

朝日さす梅のはやしのしらゆきの
とぐるこすゑにうぐひすの鳴

森鶯　　小池道子

雪さえぬ森のしたかせさむけれと

杉　重　子

にけり
上　壽　子

うつみ火
橘　御　代　子

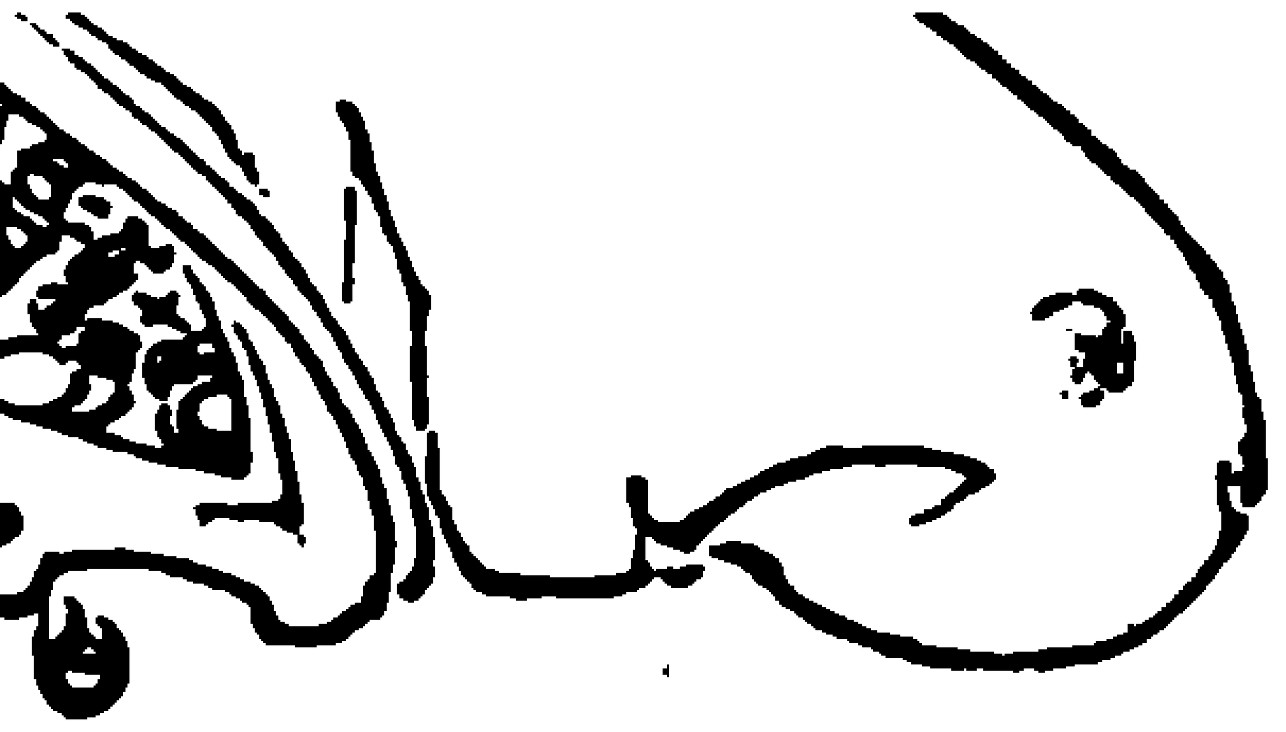
か香

上　壽　子
する野邊に、

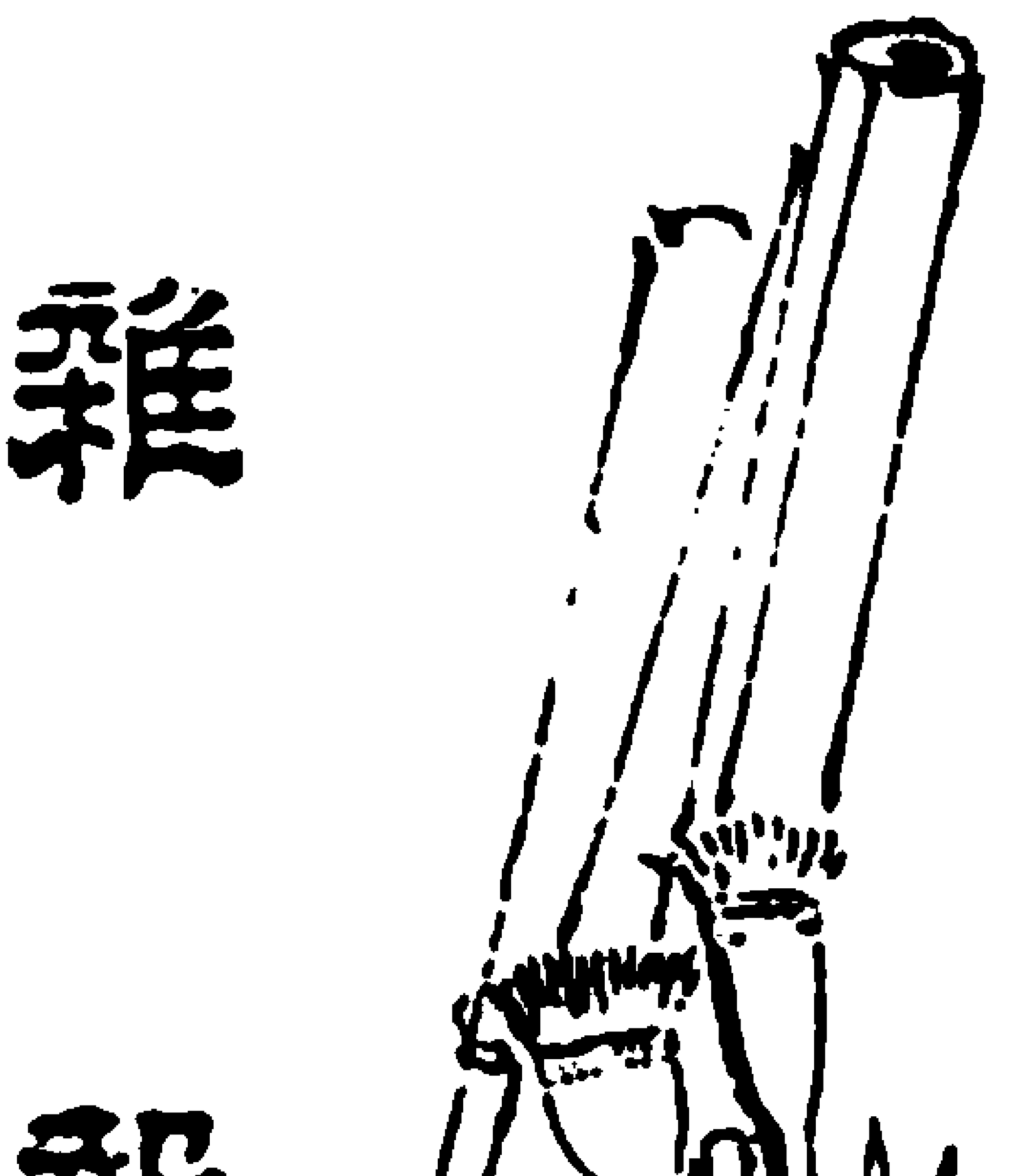
白雲のひとへのもみち葉見さへそめて
　なさつきけりないつく島山
いつくしまあきの神垣しはみちて
　浪ももみつる百のともし火
枝かはすたにのもみち葉影はえて
　錦をそゝく水の音かな
谷深みかすかに鹿の聲のして
　夕しはわびし大もとの濱



壽子
る野邊に、
名におえ、
岡邊にゆき



雜報



◎美譚　男女學生の一美譚こそあり。一人は、宇和島中學校の生徒二宮重正、脚氣症に罹り、遂に心臓痲痺して、永眠に就かんとする時、天皇陛下萬歳を三唱したこと。一人は、新潟縣高等女學校生徒で、小山かつ、(十四歳)病氣重体に陥りて

貴重なる援助を與
北京出發前、本國
置候、就中、閣下
れたる、在北京歸
英國公使館をし
る防禦の、方法を
同中佐が、當時其
に在て存する次第
爵(今の外務大臣)
功勞に對し、英國
表彰可致樣依賴有

を、英大君主、貴
貴信を以て、御申

以書翰啓上候、陳者、客年閣下の北京御駐箚中、同地公使館所在地區防衛の爲めに、力を盡したる人々の氏名を、貴國政府に御報告相成に當り、特に、在同地帝國公使館附柴陸軍中佐が、貴國公使館の防禦を全ふするに、與て力あり、從て、幾多人命を救護する事を得たるの功を、御申報相成、右御申立の次第に基き、此度貴國外務大臣より、右、柴中佐の顯著なる勳功に對する、貴國政府の賞讃の意を、帝國政府に致すべき樣、閣下へ、訓令相成りたる旨、及、右柴中佐勳功御申立と同時に、右公使館所在地區の防衛に關し、我海軍陸戰隊々長、原海軍大尉の勇武なる軍功と、並に大尉の引率せる陸戰隊及、義勇隊が、閣下に供したる援助、極めて有功なりし趣をも、併せて御申報相成り、之に對しても、貴國外務大臣

崩せらる女皇には先年來の南阿の戰爭に深く心を宿
せられ且つ近く近親に訣れさせ給ふこと多く別し

た、原大尉迄、傳
貴信を以て、御申
隊員が、貴國公使
に至り、功績を奏
隊總指揮官として
の義に有之候へ共
に貴國政府の認賞
る滿足する所に有
し可申は勿論、帝
謝の意を表し候、
表し候。敬具

崩ぜらる女皇は先年來の南阿の敗報に深く心を痛せられ且つ近く近親に訣れさせ給ふこと多く別しては昨年其故皇配アーバート公の領を襲ひザクセン、ゴブルグ、ゴータ公と稱せし第二皇子エヂンボロー公の薨去に遭ひて其哀悼一方ならず南阿に北清に國政の多端なるが上に斯かる悲哀悼惜の情の淺からず老體の御健康に適ざりしと覺く遂に今回の虛脫を招きしものならむ

◎伊藤圭介翁　鎖門の舊時代に於て、既に、其の名を世界の同學者間に識られ、明治の新時代に

同好の士と共
草木鑛物を
都に赴きて、
内の山野を跋
本新文明の啓
文政九年、(一
より江戸に上
谷助六、其の

て、中仙道の植物を採集しつゝ、名古屋に歸り、次
て、當時の學者が、最高の研究をなさんが爲め、
必ず行かざるべからざる、長崎に赴き、シーボル
トの植物園に於て、刻苦研究をなせり。當時、高
野長英も、亦シーボルトの塾に在りて、學生中に
傑出せり。

長崎に學ぶこと半歳にして、シーボルトの果園を
辭し、九州及山陽道を經て、行く〳〵植物を採拾

既に國中重要
益したるが上
學術の蘊奥
甄別したる當
」あり。此に
を張るの傍
る標本と對
疏」三冊を
草學に應用

となすべき草木を、山野に探索し、米麥穀類の缺乏を補はざるべからず。但、諸國に於て、其の品類頗る多しと雖も、此の地に用ゐて、彼處には知らざる等の事、亦少からず今之を普く知らしめ救荒の一助たらんことを欲して、玆に纂輯すとの主意を以て、草六十一種、木十九種の品目と調理方を畧記し、「救荒食物便覽」と題して、印刷し普く諸方に配布したるが如きは、翁に取っては、一小事なりと雖も、亦以て研究の精密なる、一端を知るべきのみならず、其の研究を以て、國利民

教授に任ぜら
に傳へられたる
こと遲く、文久
前漸く、翁の學
算學出役を命
而も、幕府の
能はず、翁も亦

擢で丶、奥醫師に列せしめたりき。翁の生涯は、純粹なる、學者の生涯なり。故に、維新の大波瀾も、幸にして、翁の身邊に大なる影響を及ばさず。而も翁の學殖、年と共に愈ゝ廣きを加へ、明治三年（一八七〇年）新政府に召されて、大學出仕を命ぜられたり、時に、翁は既に六十八の齡を重ねて、白髮銀の如くなりき。四年七月、文部省出仕、八月文部省教授、九月編輯權

年九月東京
月小石川植物
教授に任せら
員の審査官に
於けると同く
會場に赴き、
、慙愧措く
員院會員に
一の學士會院

ねたる明治年間に於て、愈〻多きを加へたり。其の世に公にせられたるものを列擧すれば、左の如し。

日本產物志　山城部二册　近江部二册　武藏部二册　明治六年翁年七十一

日本植物圖說草部第一册　明治七年翁年七十二

日本產物志　美濃部三册　明治九年翁年七十四

小石川植物園草木目錄　前編一册　同年

日本產物志　信濃部二册　同年

小石川植物園草木目錄後編一册　明治十三年翁年七十八

は純粹なる學
生涯の末年に
に貧すると、
に近き齡を重
の念を絶たざ
に犯され、廿
。

氣俱樂部にて催されたりと。▲大阪府師範學校附屬小學校卒業生の團體なる雛松會は、過日新年會を催したる由なるが、同會に育ちたる女松は、百二十六株にして、既に、他所にゆき自ら雛松を養へるもいと多しとぞ。▲過日名古屋市博物館にて開かれたる、同風會婦人和歌會には、伊勢神宮大宮司冶泉伯爵及夫人臨席せられたりと。同會々長は、奥田大和氏、▲信州上高井郡井上村大字九

會を開きたれば。
▲信州埴科郡
る二十日、大須賀村の慈惠學院にて開かれたり。
▲山口中將夫人以下數名の將校夫人も參會し、有益

會を開きぬ。信州埴科郡
出席者八十餘
等の有益ある
二十一年の創
颶風のため盡
の子氏にして
長の母堂ある
野足利郡北
へ、夙に婦人

る二十日、大須賀村の慈恵學院にて開かれたり。山口中將夫人以下數名の將校夫人も參會し、有益ある講話演説ありき。▲宮城婦人會は、去る二十日、高等女學校内に開けり。來會者八十餘名、中川鶴子氏の開會の辭、影山みつ子氏の庶務報告、白石つねよ氏の會計報告　小野田縣知事下條中學校長等の講話、其他面白き餘興もありて盛會なりき。▲伊豫宇摩郡土居村の有志婦人は、一婦人會を設立せんとて、目下計畫中。▲北海道江差婦人會は、去る二十日、例會を開けり。大窪視學官の

の說として、排斥
行するに至れり。此
の好結果にして、赤
、しと云ふ。
の大典を擧げさせら
着用せらゝる禮服
巴里にてなされ、
方精に成りたり、其
の飾をなしたるもの
にして、若し之を縱
の上衣の裾は、地上

事業を以て、根
生事業より割し

◎余は從來、日本人の體力を增すには、大に食ふて大に營養を取らねばならぬと云ふことを、主張して居つたが、今度、歐米各國を巡視し、各國民の狀態を見、其の衞生事業を察して、愈々前論の誤まりあると同時に、肉食にあらざれば、到底營養を充分にすることが出來ぬと云ふことを發見した、大に食するも宜しいが、大に營養になるべきものを撰ぶの必要あることは注意せんければなら

可しながら、歐米人と日本人との體格の差のみにても、此の如く異なるは、單に異人種のみでなく、食物の如何によるのである、即ち、菜食と肉食と

業を以て、根
事業より劃し
今後は益々
ではない、國
力を發達せし
しめんには、
れには、其の
ある、其れ故、
何を置いて

も、此の如く異なるは、單に異人種のみでなく、食物の如何によるのである、即ち、菜食と肉食との差が、此の如く現はるゝのである。

◎歐米人が、益々體育を重んじて、其の發達を計るが爲めに、體力が、愈々増加するに反して、日本人が、漸次に減少して來るのは、怖るべきことではないか、之を軍隊に試むるに、明治十五年頃と、二十五年と兵卒の體重を比較すると、二百七十五匁を減じ、三十五年には、更に之に倍したる

八萬五千六百廿
る獸醫が、五十
にては、平常
州二萬頭に上る
千を合して、千
弗即ち、我四
分の二は、同
國であるが、歐の
果物を以て、
なものでない。

◎以の數を見て……
爲し居るかを察するに足るであらう、體力の益々旺盛に赴むく所以も、察することが出來るだらう。

扨、斯く言ひ來れば、日本人の體力を養成せんには、是非とも肉食になさねばならぬことが明らかだが、俄かに、之を奬勵すればとて、需用が現時極めて不足であるから、先づ牧畜業を盛にせねばならない、其の方法は、一時に、大なる事業を經營せしむることが難事であるから、各人家々に、

新刊紹介

◯住友事業案内（明治卅四年）大阪北區中之島　住友本店

業物を以て、
ものでない。
りしとき、
兎的の流行
役には、軍需
ることが少な
ものと謂ふべ
の價をして

新刊紹介

○住友事業案内（明治卅四年）大坂北區中之島　住友本店
こは、名の如く、同本支店の事業案内にして、銀行、鑛業、倉庫、伸銅、製絲、樟腦等の商店、工場の數實に、二十六ケ所の寫眞を、美麗なる光澤紙摺として挿入し、位置、沿革、商標等に至るまで、逐一記載したる冊子にして、其の事業の壯大なる、優に、商海の鎮たるを伺ふに足る。（非賣品）

◎新刊寄書

題

住所
姓名

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。

○總て書式に違ひたる沒書とす。

○女子は、おにひとにても、隨意に投稿することを得。

春かすみたなびきそめて野も山も
さたかにわかねはるのゆふくれ
寺本いし子

登美子

…のやな

野やまひさいはかすみたなひく

春かすみたなひきそめて野もやまも
さたかにわかぬはるのゆふくれ　寺本いし子

わかなつむ少女かそてもわかぬまて
たかたかはらぞかすみそめたる　江本さち子

野もやまもかすみたなひく大そらに
まよひてやなくさりのこゑする　江本さづ子

うら／＼さけさ遠やまたたちわたる
ひさへばかりのはつかすみかな　伊豫田ふく子

春はまたあさちの野邊のかすめるは
もゆる小くさのけふりなるらん　戸賀崎治子

山みれはゆきはけなくにはるなれや
むさしの野邊はかすみたちけり　高橋松江子

花さりのいろにもれにもさきたちて
はるしろものはかすみなりけり　北島功子

むかひたるふもさの里もかすむ日は　北島松子

ひく 川端みち子

たり 木下鶴子

けり 青木たま子

つゝ 永井さい子

かな 社しな子

けり 瀬戸榮子

けり 山崎靜子

凪 春子

すな 福原藍子

のこしてかすむはるのあさなぎ

ゆききえてまたさほ放るやまやまを
へだてはてたるはるかすみかれ 河合縫子

うごきなきいは巻やまもけさみれば
かすみにきえてあいさしもなし 服部萬子

野も山もかすみわたりてのどかなる
はるとはなりぬはなもさくらむ 服部正子

はる〳〵とかすみ渡りておくやまの
小さりのこゑもしづかなりけり 鎌田美與子

きえのこゆきまた深きをやまたを
はるにかへしてたつかすみかな 高田香子

ほの〴〵と明石のうらのさほやまに
かすみこえたるはるのゆふぐれ 大木まさ子

野もやまもかすみの袖につゝまれて 高橋かれ子

消えのこるゆきもみながらにうら〳〵とさ
かすみにけりなこしのたかねに 後藤のぶ子

はる立とおもへば今朝は野もやまも
ひとつみどりにかすみたなびく 徳永萬壽子

春子
原菫子
本初枝子
脇米子
木れん子
尾千代野子
村竹里子
郷あき子

かすみにけりなこしのたかねは

はる立さおもへば今朝は野もやまも
ひさつみごりにかすみたなびく　徳永萬壽子

はしれどもへだつろかすみ立こめて
まなびのにはのみちたどるなり　徳永廣子

春のもりかすみのふかくなりしより
うすくれなゐにみゆる日のかげ　徳永識子

はるかすみかすむ奥こそゆかしけれ
はなにならさろささしなけれは　丹下花子

つもりてし尾上のゆきのきゐぬまに
さやまのかすみたちそめにけり　井川濱子

あさがすみゆくてもわかずたちこめて
かちのおさのみほのかなりけり　今井りう子

きのふまでこからしふきし外山まで
はるたつけふりかすみそめけり　小島しづ子

みづさりの飛び行くかけも長閑なる　田口すみ子

たれ、借さへ梅こそ此上な廿日、同じ心り、こゝらの住所となり、み居賜ふ佛を如く思ひしら蹟らなる梅を孫の花の色ね、梅は手向子が折り散さ

にしてたどりつきぬ。こゝは、やゝ小高うなりて、一筋の道を開き、右も左も幾十株と立つゝく梅の林の、今を盛りに咲きいでたる。赤きは山のはをなかばいでたる月の如く、白きは雪のきよげなるも及はじ。其のかをりのゆかしさは、伽羅沈香もかくやと覺ゆ。げに、氣高き此花よ。花の君ともではやさるるもことわりになん。又、所得顔にきなく鶯の聲も美はしう、仙女の奏したまへる物の音にもかよふらん。斯るわたりに思ふとち打群れて遊ぶは、身の幸とぞいはまし。いざ、一言のことの葉もかなと友のいへど、あまりに匂ひなき歌よま

りつゝ、
もなさばや
間はや移りぬ。
ながらつ、は

匂ひいづる、
りなひつゝ、

此の擬なるに花にあらかへしなど、語
時の移るにおどろきて、かへりぬ。

（以下原稿到着順）

。あさばや
はや移りぬ。
から、はか
けれど、猶、
の聲もをし
らん。

葦子

今日は、日
一人をそ丶の
林にわくか
りて、いとど
様は、さあが
らぬ匂の床

りあひつ丶、時の移るにおどろきて、かへりぬ。

（以下原稿到着順）

高橋かれ子

園生の梅の花盛り、いざゆかむさ、いざなはれければ、待ちこがれたる我、今日こそさ、春にはあれど、吹き渡る風の寒さをもいさはで、つれ立ちて出で行きぬ。梅の園に近けば、吹き來る風も香に匂ひ、咲きの盛りの花なつかしく、此處彼處さ、木の間をわけ入れば、鶯の木つさふ聲も聞ねて、花の色香、一入ゆかしく、口にも詞にもいひつくされじ。あはれ、霜なしのざ雪をおかしてぞ、色も香もめでたヽへらるヽけだかさよさ、語り合ひつヽ、あるは、手折りて、花瓶しになごうち興ずる内、はや日は、西にかたむきければ、名殘は、さこしなへにつきれど、又の日をちぎりて、歸ぬ夜。一夜へて、清きかなりの、秋にのこれるうれしさに、かくは記すになむ。

祝　蓉子

屋鋪鈴枝子

、一日の暇もて採る
たるもの丶ねぢより
つろひ易き花ならね
の後にいかばかり惜
静なる處に、清らな
合の友そゞのかし、
。ゆくさもなしに、
れは、破れたるま丶
に起る風の、はや香
ろに廻れは、株こそ
さながら龍の蟠るが
め、三ツ四ツ蕾に花
して「枯れたはさ思

きへだてぬ、さもごちに供なはれ、梅見に出行きぬ。此の社は、菅原道眞公を祀れる社にして、見渡すかぎりは、梅にして、あるは赤あるは白、あるは八重さ、我れおさらじさ、ほころび出にけり。鶯の囀る丶聲は、をちこちに聞ね、心もそゞろに浮きたち、長き月の暮る丶も、知らですごしにけり。

村瀬亂子

去年の秋までは、ありさしもしらざりしを、ふさ垣根の中より、みいでたれば、前栽にうゑて、明暮はくゝみたてつゝありしを。春たつ風に匂ひそめては、かたへなき時を、ほこり顔に、遠方人の袖さへ隔てぬは、うゑて見るあるしの爲には、心淺きかたはも思ひなさるれさ。かくて、年々に咲きまさりて、色をも香をもしる人の、立ちよるばかり、かをらましかば、伏屋のおもておこしならんかみなど、ひさりこちつ丶、うちむかひみれば、なかくに、あかぬものから、か丶なん。

みて堪へがたう
行く世の道に遅
からず、親しき
さ、野邊も山邊
給へさの進め上
車にて過ぎ、町
、鶯の聲があら
嬉敷心さきめき
さみねて散らさ
き其が下に行け
方に木傳ひて、
ろ、鶯の姿あは
天然の配置よろ
老いたるも、若き
れたるも、己が
けたる氣配、床

もかの面に消ねがての白雪がひまより、下萌ねいそぐ若草の、ちらほら芽など吹そめたる、むかひの山の端に見しいろは、また深からぬ霞にやあらむ、ゆく〳〵滿ち〳〵し春の光りに、目もはろ〳〵さ、身も心もいさすが〳〵しうならぬ。しばし歩みを運ぶまゝに、ほど遠からぬ向笛村なる銀世界へさはたどりつきぬ。東風吹き送る花の香をしるべに、そこはかさなくわけゆけば、霞へだてゝ、ほの白うくまなすは雲にやあらむ、やう〳〵進むまゝに、心さきめきて、覺ねずもふり仰げば、あなうれし雲かさ見しはそれならで、まがふかたなき梅が立枝の人まちがほに笑まひてこれらを迎ふるなりけり。廣やかなる園には、泉水など引きて、梅は千株にも餘りぬべく、咲きも揃はず、散りもはしめぬ風情、まづいはん方もなし。日かげ清らかにさしこめたる梢に、紅の色の、らうたきは似るものもなくやさしけれど、まさみやびにしな高きは、羅浮梅さいひて、白く、しろかれのまゝ玉を打散らしたらむが如きは、なか〳〵にたぐへつべきものもあらず、そよ吹く下風に、いびしらぬ薫り、床しさも床しく、人〳〵さ鳴く鶯の聲も

…けり、おい、この
ちなる我身の、か
おきぬ。

徳永寬子

り、ひさつふたつほ
るにおどろき、菜
…、二三人うちつれ
にあれども、まには
のり、白に赤のまじ
しく、百千鳥の、な
其のけしきな。ほ
女御の一首の歌よ
深く感ぜられて
なりぬさ、人々の



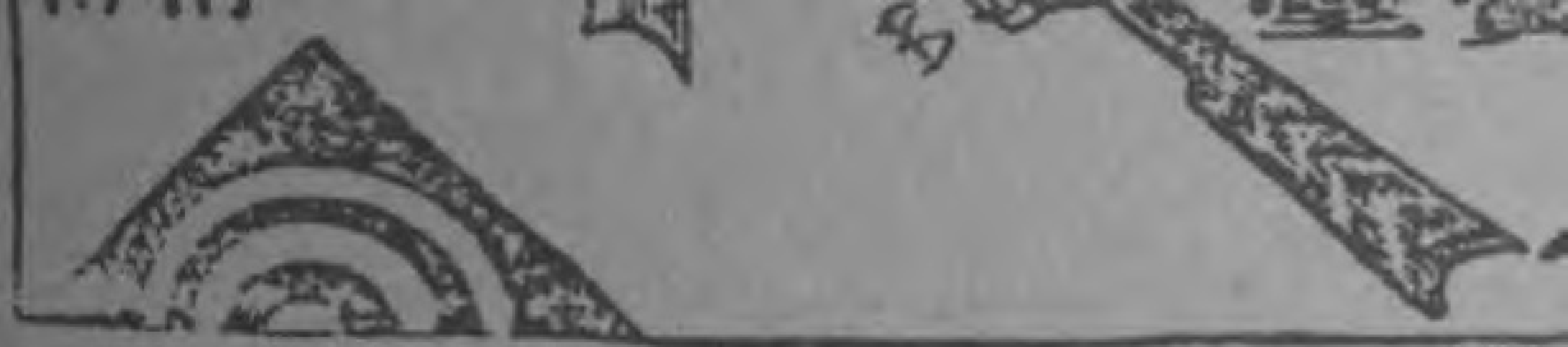
全壹冊洋装
六百五拾頁

…編著

…畧傳

全壹冊洋裝
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵税十里以内七錢百里以内十二錢百里以外廿四錢

微細なる古學小傳の類に過ぎず徳川時代文學史の研究に不便少からざ…傳を**參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尚之に滿足せずして略傳と名づけられたれど其實**今日**に於ては…**傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年までの有職故實家神道家語學者文人歌人等**五百四十名**…かつ引用書目を…たり或はこれを**國學者人名辭**書ともいふべくまた**列傳体**…ありて捜索に便に**國學傳統系譜**ありて各學者の學統を一目に見るべく**國學者**…[illegible]は反覆何度[illegible]の勞を執られたれば其正確…



◎高象眼入（拾八金製價拾五圓）

徒らに金の量の重を好み、不細工なる指環を貫て、是見よがしの誇り顔は、第一に美人の品位を劣し、物欲さうに見え、其上に穿ければ指が痛み、寛ければずるりと脱て不愉快至極、實を申せば文明世界の笑艸、風流でも無く優美でも無し

本堂は東京固有の江戸趣味に、歐米斬新の意氣を加へ、想を凝しふを潜めて、新たに工夫し得て、今度漸く新製せる天賞堂指環の特色を擧れば

一…細工の及ぶだけ量を減じ恰好よく優美に高尚なるを専一とする事

二…専ら細工に力を注ぎ彫刻の妙を主とする事

都會の美人と成り玉ふか、抑々田舍風の不恰好を意とせずして人の嗤ひを取り玉ふか、兎も角も本堂へ御臨ありて、天賞形の風流なる指環を御覽せよ、本堂は偏に光來を待ち奉るなり

東京京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九、番地電話番號新橋三百三十三（長距離加入）

時計寶玉類
貴金屬美術
品及各種銃砲 商 **天賞堂**

天賞堂出張所々在地◎東京市神田小川町◎横濱市◎名古屋市◎大阪市◎廣島市◎長崎市◎熊本市◎小樽臨時